

Association for Research on the Impacts of War
and Military Bases on Women's Human Rights

「女性・戦争・人権」学会 ニューズレター第 23 号

2008 年 4 月 21 日

< 目次 >

I 巻頭の言葉	中原道子
II 事務局報告	岡野八代
III 2008 年度大会のお知らせ	
IV 学会誌『女性・戦争・人権』第 9 号について	大橋 稔・大越愛子・井桁 碧
V エッセイ	
映評	大越愛子
書評	清末愛砂
VI 会員の著書紹介	
会費の振り込みのお願い	
編集後記	

I 巻頭の言葉

中原道子

会員の皆様、お元気でしょうか。学会の運営委員として、その活動のためにつくして下さった菊地夏野さんが、運営委員をお辞めになりました。菊地さん、本当に、有り難うございました。心からお礼を申し上げます。

また、事務局が、近畿大学の¹大越愛子さんの研究室から、立命館大学の岡野八代さんの研究室に移りました。大越さんは、学会の設立時からこれまで、十年もの長いあいだ、学会事務局を引き受けてこられました。学会が今まで、たいした齟齬も来たさずに、継続、運営できたことは、大越さんの超人的な事務局運営にあると思います。ここに心からの感謝を捧げたいと思います。立命館大学には「学会」の会員の方々もいらっしゃるので、心強い限りです。どうか宜しく御願ひします。

中原は、二月中旬から三月末までドイツでの調査、及び、ロンドン大学バークベック・カレッジでのマスターコースのゼミ、及び公開講演のために招待され、日本を留守に致しました。ドイツでの体験は、学会誌 9 号の序に書きました。バークベック・カレッジでのゼミは(1) Malayan Labor on the Thailand-Burma Railway, :Legend of the Death Railway: Death Without Epitaph, (2) Civil Society, NGO Work, and the Freedom of Expression in Contemporary Japan、の二回で、公開講演は、Recent Development in the controversy over Japan's Military Sexual Slavery System During WWII というテーマで致しました。(1)では、英国の戦争体験の中に欠落しているアジア、特にアジアの「人びと」の記憶、具体的には私が 1990 年から始めた聞き取りに基づくアジアの「人びと」の記憶についてとりあげ、英国の植民地支配について学生と考えたいというのが目的でした。(2) はこのようなテーマでという注文で決めたもので、これは、今年の 2 月 11 日「建国記念日」の私の体験を使って話しました。私は当日、反天皇制運動連絡会の集会で「日本軍性奴隷制問題は世界へ」という話をし、そのあと水道橋から靖国神社の近くの公園までデモに参加しました。100 人ほどのデモの参加者は楯をもった、機動隊に二重に規制を受け、出発をしましたが、日の丸や戦前の（今も海上自衛隊が使っていますが）海軍旗で満艦飾の右翼の街宣車が²大音響（耳をつんざくような騒音が規制もされずに許されています）で、「非国民、日本から出て行け」の大合唱でした。街宣車の右翼の発言者というか罵る人々の特徴は必死に相手を攻撃しようとするあまりなのか、非常に下品なことです。「テメエ」とか「ブッコロス」とか「チョーセン」とか、「ニホン

カラデテケー」とか。それ以上に驚くことは、100人のデモに700人の機動隊が動員され、デモと右翼の周辺は公安がはりついていて、警察の背の高い指揮車が機動隊だけでなくデモや右翼を指揮(?)・規制したり、水道橋から靖国神社一帯は騒然たる騒ぎでした。ロンドンでのゼミでは、インターネットから取り出した、その状況を写真で見せたのですが、学生達は本当にびっくりしていました。

日本の言論の自由は「憲法に書かれた自由」になりつつあります。天皇制に反対の意思表示をすることが700人の機動隊の出動をまねき、ジェンダーフリーという言葉を使っては講演は中止に追い込まれ、ドメスティック・バイオレンスをテーマにした講演が右翼の脅しで簡単にキャンセルになる、日教組の研修のための場所をホテルは使用拒否をする、自衛隊反対のビラをアパートの郵便受けにいれると逮捕される、映画「ヤスクニ」は国会議員の介入で上映が取り消されると、私たちの日常の中で言論の自由は「憲法に書かれた自由」に成りつつあります。私たちは、フェミニストとしていやなことはいやだという精神で、沈黙することなく「憲法に書かれた自由」を括弧から解放し、守りたいと思っています。6月の総会・シンポには1人でも多くの会員の方の参加をお待ちしております。

II 事務局報告

II-I 事務局報告

事務局の移動について

すでに、07年度秋季研究会のお知らせの際にお伝えしたように、07年9月より、学会発足以来10年間事務局を引き受けてくださった近畿大学・大越愛子さんにかわり、立命館大学・岡野八代が事務局を引き継ぐことになりました。

また、本年度大会は、以下にお知らせするように、6月8日に立命館大学で開催することとなりました。よりいっそうの活発な学会活動に少しでも寄与できるような、事務局運営を心がけていきたいと思えます。学会運営に関するご意見や、学会員の方の活動記録など、NLその他を通してみなさんと情報を共有できるよう努力していく所存です。よろしくお願ひいたします。

新事務局住所

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学法学部 岡野八代研究室

mail: joseijinken@mail.goo.ne.jp *メールアドレスが新しくなりました。

II-II 活動報告

07年10月14日に開催された運営委員会で、以下のように代表以外の運営委員の役割分担を決定いたしました。

事務局：立命館大学・岡野八代、清末愛砂、石川雅也、志水紀代子

学会誌編集：井桁碧、大越愛子、大橋稔

会計：石川雅也

NL編集：清末愛砂・岡野八代・大橋稔

NL印刷・発送：志水紀代子

企画担当・広報：清末愛砂、石川雅也、志水紀代子、

ML管理：大橋稔

なお、07年6月24日に開催された大会で承認された運営委員の山下英愛さん、菊地夏野さんについては、ご本人の都合により委員を辞退されました。

07年12月1日に秋季研究会として、「平和への語り・接近 ベティ・リアドンさんを囲んで」を開催しました。

当研究会は、大阪大学グローバル COE「コンフリクトの人文科学」内のプロジェクトの一つである「排外的ナショナリズムと暴力に関するジェンダー・パースペクティブによる研究」との共催で、大阪大学から牟田和恵さん、ベヴァリー山本さん、当学会からは、中原道子さんが報告されたあと、アメリカ合衆国における平和研究の第一人者のリアドンさんから講演をいただきました。研究会の簡単な内容と、リアドンさんのご講演の詳細については、学会誌 9 号に掲載されます。



20人ほどの参加者が集まる小さな研究会でしたが、大学生・院生の参加も多く、社会における暴力構造をいかに転換していくか、について活発な意見を交換することができました。

また、その後の懇親会に参加されたリアドンさんから、学会の主旨に賛同し学会に加入したいとの申し出を受けました。その後、学会員となるにあたり、リアドンさんから次のようなメッセージをいただきました。原文とともに日本語訳（岡野拙訳）を受けてご紹介いたします。

I wish to thank you for the opportunity to participate in the December 1st meeting of the Association for Research on the Impacts of War and Military Bases on Women's Human Rights. It was a privilege to be among these highly professional and committed feminist researchers. I am honored that you have accepted me as an associate member. I will look forward to keeping apprised of your work.

Your work will also be of great interest to FeDem, the Feminist Scholar/Activist Network on Demilitarization. I will pass along to them and to other women's networks, news from your association.

With my best wishes for the successful continuation of your essential work,
Betty A. Reardon

（日本語訳）

さる12月1日に開催された「女性・戦争・人権」学会・秋季研究会に参加する機会を与您に提供していただき、感謝しております。研究意識のたかい、責任感あるフェミニスト研究者とともに、研究会に参加できたことは光栄でした。学会員として受け入れられたことを名誉に感じています。今後も、みなさんの研究を学んでいけることを楽しみにしています。

みなさんはまた、脱軍事化をめざすフェミニスト研究者・アクティヴィストのネットワークである FeDem に関心をもたれるのではないのでしょうか。当学会からのニュースを、FeDem や、その他の女性のネットワークにも伝えたいと思います。

みなさんの貴重な仕事が、今後とも成功し続けることを願ってやみません。

ベティ・A・リアドン

III 2008 年度大会のお知らせ - 2008 年 6 月 8 日 於 立命館大学衣笠キャンパス

III-I 「女性・戦争・人権」学会 08 年度大会 趣意書 テーマ「メディアとジェンダー」

グローバル社会の到来と情報技術の驚異的な発達、は、「情報」がもつ社会的な意味合いを大きく変化させました。現代社会において「情報」は、わたしたちに新しい公共空間を提供し、国境などの既存の空間的限界を超えて、ひとびとが連帯しうる可能性を拓いてくれています。また、インターネットなどメディアの多様化によって、わたしたちは求める情報を積極的に収集できる可能性を手に入れています。

しかし他方で、「女性・戦争・人権」学会で10年にわたり取り組んできた日本軍性奴隷制問題は、国家権力が自らの暴力性を隠蔽するために情報を歪曲、メディアを抑圧することを如実に示す契機となりました。NHK 教育テレビの ETV2001 で放映された「問われる戦時性暴力」（2001 年 1 月 30 日放映）は、すでに多くの関係者が証言するように、「公共」放送局である NHK が、その公的任務を放棄し、政府与党の政治的圧力に屈した、現在の日本における民主主義の衰退を象徴する番組

でした[cf. メキキネット編『番組はなぜ改ざんされたか』（一葉社、2006年）]。「戦時性暴力に対する日本国家と天皇の責任」を隠蔽した「改ざん事件」を通じてわたしたちは、男性中心主義的な構造を「自然」に装う表象権力、テレビという巨大メディアにおける一国中心主義、そして、女性に対する暴力の歴史を直視することなくやりすごしてきた日本社会の現在の姿を目の当たりにしたといてよいでしょう。

メディアをめぐる以上のような状況を踏まえ、08年度「女性・戦争・人権」学会・第11回大会シンポジウムでは、「NHK 改ざん事件」に深く関わり、被害を受けた坂上香さん、本田雅和さんの2人をパネリストとして、また北原恵さんをコメンテーターとして招き、ドキュメンタリー作家、新聞記者、そして表象研究者といったそれぞれの実践的な立場から、メディアの現在について論じていただくことにしました。

ジェンダーの視点からメディアの表象を注視することで明らかにされるジェンダー・バイアス、そしてそのバイアスに込められた政治的メッセージとは何か、また、社会における暴力の連鎖を食い止めるための思考を映像として表現するとはどのような試みなのか、メディアの中央集権主義に対抗する新しい情報発信はどのような形で可能になるのか、など。それぞれのパネリストの実践は異なりながらも、国家暴力と情報・暴力と女性・周縁と女性といった、多くの共通するテーマが報告を通じて明らかになることが期待されています。

私たちは、大会に参加されるみなさんが、シンポジスト3人のご報告に対して、単なる情報の受け手としてではなく、情報に含まれる暴力性やジェンダー・バイアスを鋭く問い直し、情報を発信していく当事者として、議論に参加できるような大会を目ざしています。本大会を通じて、メディアとジェンダーの新たな関係や、反・暴力的な表象の在り方を構想する可能性を探っていきたいと思っています。

III-II 第11回「女性・戦争・人権」学会大会プログラム

全体司会 志水紀代子さん（追手門学院大学）

10 ~ 11時 総会

司会 清末愛砂さん（大阪大学）

11 ~ 12時30分

個人研究報告 高橋慎一さん（立命館大学大学院文学研究科）

「『府中青年の家裁判』と反リブ言説の論理 - 『アイデンティティの政治批判』」

コメント・司会 井桁碧さん（筑波学院大学）

12時30分 ~ 13時30分 お昼休み

大会シンポジウム「メディアとフェミニズム」

司会 大越愛子さん（近畿大学）

13時30分 ~ 15時10分 映画『ライフアーズ』上映

15時15分 ~ 15時55分 シンポジスト 坂上香さん（津田塾大学）

「『ライフアーズ』と歩む ~ 被害、加害、reconciliationをめぐる映像製作」

16時 ~ 16時40分 シンポジスト 本田雅和さん（「女性・戦争・人権」学会会員）

「権力とジャーナリズムの近況」

16時40分 ~ 17時 コメンテーター 北原恵さん（大阪大学）

17時10分 ~ 18時10分 全体討論

18時10分 ~ 18時20分 学会アピール

日時 2008年6月8日（日曜日）

場所 立命館大学衣笠キャンパス内創思館1F カンフェランス・ルーム

参加費（映画上映費・資料代） 非会員 1500円、一般会員 1000円、学生 500円



アクセス方法

* JR・近鉄京都駅

市バス 50/快速 205 にて (約 35 分) 「立命館大学前 (終点)」下車

市バス 205 にて約 35 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バスにて約 30 分、「立命館大学前」下車

* JR 円町駅

市バス快速 202/快速 205 にて (約 10 分) 「立命館大学前 (終点)」下車

市バス 205 にて約 10 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

JR バスにて約 10 分、「立命館大学前」下車

* 阪急電車西院駅

市バス快速 202/快速 205 にて (約 20 分) 「立命館大学前 (終点)」下車

市バス 205 にて約 20 分、「衣笠校前」下車、徒歩 10 分

* 阪急電車河原町駅 (四条河原町)

市バス 12/51 にて (約 40 分) 「立命館大学前 (終点)」下車

学会誌『女性・戦争・人権』第 9 号について

会員の皆さま、お待たせしている『女性・戦争・人権』9 号は、以下のような内容を予定しております。

2006 年度大会における報告をもとに原稿化された三つの論文

「フェミニズムと労働」(竹中恵美子)

「日本の売春政策とセックスワーカーの現状 フェミニズムの視点から」(水島 希)、

「韓国における性売買関連法制定の経緯 女性運動の取り組みを中心に」(山下英愛)

投稿論文

「アクティブ・ミュージアム「女たちの戦争と平和資料館」から考える平和博物館の課題」(福島在行)

翻訳論文 「1920 30 年代における新女性と「妾/第二夫人」 植民地近代における自由恋愛結婚の決裂と新女性の行為性」(石島亜由美、カン・ガラム)

研究ノート

「自由・監視・コントロール社会をめぐる議論動向」(高橋慎一・倉橋耕平・堀田義太郎)

書評

『ジェンダー視点からみる日韓近現代史』(河かおる)

『生のあやうさ』(大越 愛子)

特別寄稿

ベティ・リアドンさんの講演記録(通訳・秋林 こそえ)

「フェミニズムと労働 アンペイド・ワークとセックス・ワーク」をテーマとした 2006 年度大会(2006 年 6 月 18 日、近畿大学於)での報告をもとに提出していただいた論文はもちろんのことですが、力のこもった文章を寄せてくださった執筆者の方々に感謝するとともに、会員の皆さまに、第 9 号発刊をお知らせいたします。

編集担当:大橋 稔・大越愛子・井桁 碧

V エッセイ

映評 「不条理ゆえ愛の葛藤」・・・戦時レイプ被害描いた映画「サラエボの花」

大越愛子

女性が 妊娠・出産可能な身体 として存在するのは、根源的不条理である--今秋開かれたリブロダクション(性と生殖)をめぐるシンポジウムで、私はこう問題提起した。この不条理は、戦時においては、いっそう剥き出しの形で現れる。いわゆる「戦時性暴力」だ。

映画「GRBAVICA(サラエボの花)」は、90年代初頭のボスニア内戦時に起こった集団レイプの犠牲者である女性、エスマの現在を描いた映画である。彼女はレイプによって身ごもった子どもサラを、凄まじい葛藤の中で出産し、愛憎に満ちた複雑な感情を抱え、貧しさと闘いながら育てている。12歳、反抗期に入った娘と母の日常が、戦争の痕跡とともに、淡々と描かれる。そしてサラが自分の出生の秘密を知ろうとしてエスマに迫る場面が、物語のクライマックスとなる。

74年にサラエボで生まれた女性監督、ヤスミラ・ジュバニッチは、自身が出産したとき、この作品を思いついたという。生命の源であるはずの「妊娠・出産する身体」に、なぜ暴力的な欲望が向けられるのか。なぜ忌まわしい出来事によっても生命は宿ってしまうのか。産みたくなかった子どもを産んでしまった後に、どのようにして子どもと関わることができるのか。愛することができるのか。

ジュバニッチ監督は、この作品を「愛についての映画」と言い切る。彼女のいう「愛」とは何だろうか。いかなる暴力によっても、産まれた生命は「愛をもたらず」というような単純な映画では、もちろんない。トラウマに苦しみ、「愛する」ことに心を閉ざして不安定な状態にいる母に、「私は愛されていないのではないが、いつか捨てられるのではないか」という娘の疑心暗鬼に満ちた視線が、突き刺さっている。

だが、そうしたお互いの心を探り合うような関係は、エスマが真実を告げることで一変する。ここからの二人の関係の描き方を楽観的すぎるとは、私は断じて言いたくない。これ以上ない程に傷つけあい、傷ついてしまった二人の女性の関係は、絶望と破局ではなく再生に向かうしかないのだと、主張する監督の力業に脱帽するからである。

戦時性暴力は、「暴力があった」と誠実に認めれば済む問題ではない。「暴力」は「不可避な運命」ではないからだ。「妊娠・出産する身体」に加えられた暴力がどのような結果をもたらずのか。被害女性がどのような葛藤に苛まれ、何と格闘せざるをえないのかについても考える必要がある。つまり、私たちが暴力からのサバイバー(生還者)とどう出会うのかが、問われることになる。

「妊娠・出産する身体」がゆえに暴力に曝されるという何重もの不条理を踏まえつつ、なおそこに「愛」を創り出そうする意志。これは、今秋、全国証言集会のために来日された、日本軍性奴隷制の被害女性たちからも感じたものである。「暴力」を無力化していこうとする「愛」。それをなお「暴力」で破壊する世界なのか。問い続けたい。(2008年1月13日の朝日新聞に掲載されたものを修正)

書評 志水紀代子『<現代社会の倫理を考える・第14巻> 家族の倫理学』(丸善株式会社、2007年)

清末愛砂

本書は非常に読みやすい本である。メディアによる報道を通して耳にしたことがある事件を例として、多様化が進む現代社会の「家族」の在り方と身近で起きている問題との結び付きが論じられているからだ。具体的には、作りだされた「家族」神話に対する疑問とジェンダーの視点から、夫婦間のDV事件、代理出産をめぐる出生届不受理事件、児童虐待、学校でのいじめ、少子化問題と晩婚化、公立学校における教育改革、そしてBYJ(ペ・ヨンジュン)家族が次々と分析されていく。

前半では、家族の定義、日本の戸籍制度の成り立ち、家庭における女性の役割の変遷と専業主婦、「理想の家族」論と神話の崩壊、メディアが日本社会に提供してきた家族のイメージが解説されている。大学院で家族法・ジェンダー法の研究室に所属してきた私にとって、そこで描かれている情報の多くは新しいものではなかったが、「家族」という空間から派生する問題をあらためて考える

上で非常に参考になる章がいくつもあった。また、それまで「家族」という存在そのものに疑いを持たず、あるべきものとして受け入れてきた人々にとっては、現代社会の家族論を考える上で入門書として十分な役割を果たすものであろう。

少子化の理由に関しては、私自身、陥りやすい罠にはまっていたことを本書から学んだ。少子化傾向が進むのは女性の晩婚化が主な要因であると単純に考えてきたが、そこには男性の晩婚化に対する視点が欠如しており、「生む性である女性を基準にしてきたのは、明らかに女性を生む機械としてみる考え方」（97頁）にまんまと囚われてしまっていたのであった。

同書で最も注目されるべき章は、第12章「『BYJ 家族』 - 新しい家族のモデルとして」、第13章「ハンナ・アーレントが目指した関係性の中に生まれる『世界』」であろう。12章では、2003年に日本社会でブレイクし、多くの女性ファンを得た韓国ドラマを通して始まった「韓流ブーム」に着目し、そのなかで生じた「BYJ 家族」（＝ペ・ヨンジュンとそのファンから成る空間。ペ・ヨンジュン自身がファンのことを家族と呼んでいる）に著者は一つの可能性を見出している。

著者は、ペ・ヨンジュンのファンのことを「アジアに目覚め、アジア人として国境を越えて連帯していくことの大事さを、ペ・ヨンジュンの生き様を通して知っていった日本人たちは、実はこの日本に、そうした橋渡しをしていくことのできる人たちが身近にいることに気がついた。その人たち、つまり『在日』韓国・朝鮮人との交流がいつそう深まったのである」（138頁）と指摘している。また、ファンの間での交流においては、「日本在住の外国人、特にアジア系の外国人に対する偏見は、殆どと言っていいほどなくなって」（142頁）おり、「彼女たちによって、もはや国境は重要な意味を持たない。BYJ 家族として、どんどん越境していくのである」（同頁）とも描いている。私自身は、朝鮮半島における日本の植民地主義、および在日朝鮮人に対する差別・偏見を含む日本の戦後問題がそれほど簡単に「乗り越えられる」ものだとは思えないが、一方で大衆文化を通してこのような「国境を超えた」交流が育まれてきた事象を大きな関心をもってとらえている。

勿論、著者は BYJ 家族を構成するファンの間では、日本と朝鮮半島に間にある政治・歴史問題を避ける傾向があり、その意味において限界があることを認識している。それでもなお、このような「家族」の在り方が「これまでにない開かれた世界、アーレントの友愛の世界をほうふつさせるものである」（143頁）としている点が興味深い。

13章では、12章を受けて、ペ・ヨンジュンの日本公式ホームページ上で展開されるファンによる書き込みと意見交換の場を紹介しながら、ハンナ・アーレントが求めた世界観、政治的自由を考察している。主体的に動くことができる人間が自由に発言をし、他者と意見交換する場が共有されることで、アーレントのいう「人と人との間に世界が生まれる」状況が創りあげられる。そのようななかで、著者が本書で挙げた家族をめぐる諸問題が議論されることが求められているのではないだろうか。

VI 会員の著書紹介

- 志水紀代子『<現代社会の倫理を考える・第14巻> 家族の倫理学』（丸善株式会社、2007年）
岡野八代「フェミニズムと法・国家論」辻村みよ子編『ジェンダーの基礎理論と法』（東北大学出版会、2007年）：267-291
岡野八代「平和を求めると 安全保障からケアへ」太田・谷澤編『悪と正義の政治理論』（ナカニシヤ出版、2007年）：214-241
岡野八代「女から生まれる - - 「家族」からの解放 / 「ファミリー」の解放」戒能民江編『国家 / ファミリーの再構築 - - 人権・私的領域・政策』（作品社、2008）：106-124
秋林こずえ「ジェンダーと人間の保障 - アジアから」田中かず子編『ICU21世紀 COE シリーズ第7巻 アジアから見るジェンダー』（2008年、風行社）：55 - 69
清末愛砂「第6章 パレスチナ人の苦難から考える正義」木戸衛一・長野八久編著『平和の探求 - 暴力のない世界をめざして』（解放出版社、2008年）：56 - 64
清末愛砂「第3章 ジェンダー」（床谷文雄との共著）高坂章編『国際公共政策学入門』（大阪大学出版会、2008年）：65-96

深山あき歌集 II 『風韻にまぎれず - <哀号>の叫び』 III 『風の音楽 - はばたけ九条の心』 (鈴木裕子編・注) (梨の木舎、2007年)

チョン・ギョンア著・山下英愛訳『まんが「慰安婦」レポート - 私は告発する』 (明石書店、2007年)

戸塚悦朗『普及版 日本が知らない戦争責任 - 日本軍「慰安婦」問題の真の解決へ向けて』 (現代人文社、2008年)

黒瀬 勉 「第8章 クローン技術の応用をめぐる倫理的問題」「第11章 社会的共通資本としての医療制度の危機」霜田求 世話人『医療と生命 3』(シリーズ<人間論の21世紀的課題>) (ナカニシヤ出版、2007年) : 104-116、146-157

会員の皆さま

近刊の著書や論文に関する情報を事務局にお寄せください。ニュースレターにて、紹介させていただきたいと思います。よろしくお願いします。

会費の振り込みのお願い

2008年度の会費の振り込みをよろしくお願いいたします。全会員に振り込み用紙をお送りさせていただいておりますので、すでに振り込んでいただいた方にも同封されています。ご了承ください。

編集後記

もう少し早く編集をする予定でしたが、最近の話題? 映画「実録 連合赤軍あさま山荘への道程」(若松孝二監督)をついつい観てしまい、脱力状態になってしまいました。これほどマッチョな映画が注目をあびている日本社会のジェンダー問題の深刻さをあらためて認識させられたように思います。今日の朝は少しだけ取り直して、編集を始めました。会員の皆さん、ニュースレターに情報・エッセイ等をお寄せください。事務局の移動とともにメールアドレスが変わりましたので、新アドレスまでお願いいたします。

最近嬉しかったニュースといえば、4月17日に名古屋高裁で出されたイラク駐留の米軍に対する自衛隊の支援活動が日本国憲法9条に違反するとした判決でした。損害賠償が認められなかったという意味において裁判としては原告敗訴なのですが、被告勝訴の判決であるために国側に上訴が認められないことから、この違憲判決は確定判決となりました。実質的な勝訴判決です。福田首相はこの判決を受けて、「傍論。ワキの論」とコメントしました。唾然とさせるこのコメントは、明らかに日本国憲法99条の憲法尊重擁護の義務(天皇、摂政、国務大臣、国会議員、裁判官、その他の公務員による憲法遵守義務)に抵触するものです。憲法のことを知らずに、よくも大臣が務まるものですね。この国の政治家のレベルを見事に体現しているとも言えるのではないでしょうか。あ、でもこのような政治家を選んでいるのは、「私」を含む「国民」という現実を目の前にすると、選ぶ「権利」を国籍ゆえに特権的に有している私の責任も重いわ(清末愛砂)。

学会事務局連絡先

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学法学部 岡野八代研究室

mail: joseijinken@mail.goo.ne.jp

Website: <http://www.war-women-rights.ac.jp/>

振込口座 00900-6-38551 「女性・戦争・人権」学会